5 最先端の島

森 悠統
MORI Yuto
長崎県対馬市教育委員会文化財課

「最先端」と聞いて何を思い浮かべるだろうか？　流行、先進医療、最新技術…それらの多くは外からもたらされ影響を受けることが多い。古来より海峡を越えて南北から人と文化が往来し、物的・人的交流の最先端であり続けた対馬。その受容の歴史とは？

はじめに

対馬島と韓（朝鮮）半島は、気象条件が整えば互いに対岸の様子がはっきりと目視できるほどの距離に位置している。対馬はこうした地理的環境や歴史的経緯から「国境の島」、「対外交流の最前線」などと表現されることが多い。また、韓半島や九州島からの文化を受容する「最先端の島」としての顔も持ち合わせている。

本章では、対馬のこうした性格はどのようなプロセスで形成されたのか、縄文時代から中世までの歴史を概観しながら考えてみたいと思う。

縄文時代（越高遺跡）

越高遺跡は、現在対馬で確認されている中で最古の集落遺跡であり、海峡を往き来した人々の痕跡をたどることができる場所である。対馬北西部に所在し、縄文時代早期末から前期にかけて（現在から約7,200～6,400年前）の遺跡である。遺跡は現在の越高集落南東側の海岸に位置し、海浜部および壇状地形の標高1～8mにおいて遺構・遺物が確認されている。遺跡の眼前に広がる仁田湾は船をつけるのに適した穏やかな湾であり、夏は台風、冬は北西からの季節風をしのぐことができる地形となっている。

越高遺跡では、日本列島の縄文文化圏ではほとんど見られないものと、九州本土との往き来を示すものとが確認されている。

まず、前者について、1.1m四方に板石を四角く並べて作られた炉跡が挙げられる。この炉は、金属加工や陶磁器焼成のためのものではない。内部から骨片や土器片、床面から焼土が確認されており、当時の人々が暖を取ったり、煮炊きをしたりするためのものと考えられる。規格性の高い炉の形状は、対岸の韓半島南海岸の遺跡（東三洞貝塚：釜山広域市影島区※1）等で類例が確認されている。同時期の縄文文化圏においては、丸い石を円形や楕円形に並べた炉が大半であり、現在の日本列島の遺跡では越高遺跡だけで見られる、この遺跡を特徴づける遺構である。

また、越高遺跡では、隆起文と呼ばれる、土器表面に粘土紐を貼り付けて指や道具による文様が施された土器が遺物の大半を占める。隆起文土器は、炉跡と同様、韓半島南海岸のものと酷似している。さらに、対馬産粘土を用いたものが含まれていることから、単に土器を搬入しただけでなく、半島の人々が対馬に渡来し、対馬で一定期間定住生活を営んでいたことまで判明した。

こうした往き来の動機の一つとして、九州産黒曜石※2の入手が考えられる。越高遺跡出土石器・石材の多くは黒曜石であり、分析の結果、産地は九州北西部、特に佐賀県伊万里市の腰岳産が中心であることが分かった。また近年、韓半島南海岸で見つかった黒曜石はほぼ全てが九州北西部産であったという研究成果があり、対馬を介した九州産黒曜石流通の詳細が明らかになりつつある。

当時の状況について、さらに類推すると、韓半島から来た渡来人らは、越高の地で九州北西部産黒曜石を得る対価として何かしらの物品を用意していたはずである。その物品が何であるか、など詳細は不明であるものの、対馬島では海峡を越えた最先端の物々交換が行われていたと考えることができる。

※1　影島区との交流…1986年に対馬と影島区が姉妹島縁組を締結し、2005年の対馬市発足後は市として再締結した。両地域の行政に関するテーマについて事例発表や質疑応答を行う「行政交流セミナー」を行うなど、現在も行政職員の相互交流や文化交流など活発な友好関係を続けている。

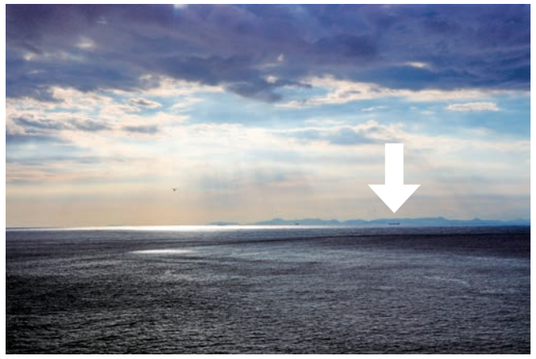

写真1　対馬島から見た韓半島

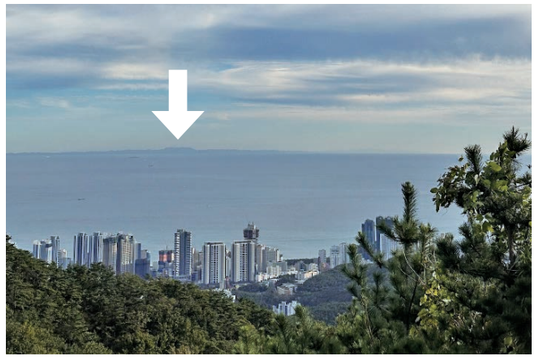

写真2　韓半島から見た対馬島

写真3　越高遺跡遠景（南東から）

弥生時代（魏志倭人伝）

その後の弥生時代、対馬は、魏志倭人伝※3に「良田無く、海の物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴す」と記述されている。「市糴」とは米などの食糧を買うことであり、「南」は九州北部、「北」は韓半島を表す。良い田地が無く、魚貝を採り、船に乗って九州本土や韓半島に米を求める生活は、その後の時代も長く続いており、対馬の宿命的なものといえる。対馬の中央に位置する浅茅湾は、そうした南北市糴の拠点として機能した。対馬の弥生遺跡は島全体に分布しているが、特に三根湾・浅茅湾周辺に密集しており、遺構や遺物の質も高い。そのため、この一帯が対馬の弥生文化の中心をなしていたと考えられる。

古墳時代（対馬の古墳）

対馬では、古墳時代前期（紀元250年～4世紀前半）から古墳の造営が見られるが、中期以降、出居塚古墳、根曽古墳群、サイノヤマ古墳など美津島町雞知一帯を中心に築造されている。また、古墳以外

※2　黒曜（耀）石…黒く輝くという意味のガラス質の岩石。先史時代から刃物（狩猟具、解体具、武器）として利用されてきた。対馬と韓半島南海岸地域（現在の木浦～蔚山周辺）では産出されない。対馬周辺の主な原産地としては、九州北西部と白頭山（現在の北朝鮮）が挙げられる。

※3　魏志倭人伝…中国の歴史書『三国志』中の「魏書」第30巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条の略称。当時、日本列島にいた倭人の習俗や地理などについて記されている。

写真4　越高遺跡の発掘調査の様子と炉跡遺構

写真5　隆起文土器

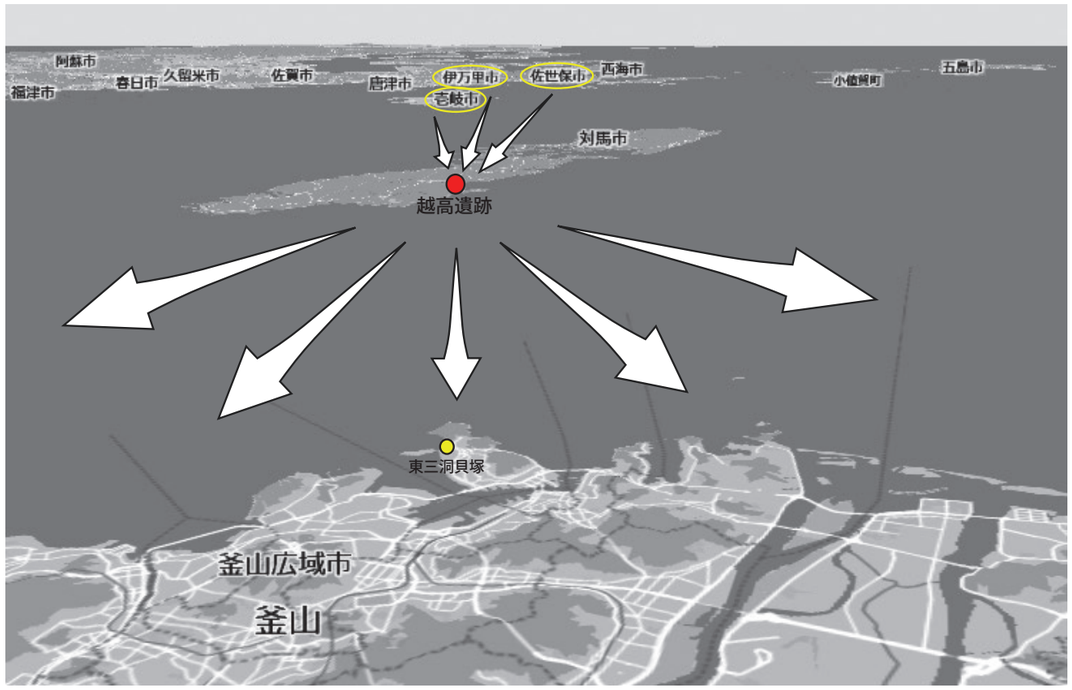

図1　対馬を介した黒曜石の流通イメージ

にも弥生時代から続く箱式石棺墓が島内各地に築造されている。終末期（7世紀後半頃）には、大陸からの仏教伝来（6世紀半ば）や、大化の改新の一環で出された薄葬令※4など、古墳時代開始以来の葬送儀礼が大きく変革していく時期の特徴を持つ矢立山古墳群（厳原町下原）がある。

これらはいずれも、墳形や石室の形、出土遺物などから、中央政権と強いつながりを持った人物らが埋葬されていたと考えられている。すなわち、中央の動向を察知して流行の先端を即時取り入れた葬送の在り方から、対馬が中央政権の権力の及ぶ境界域として認識されていたことがうかがい知れる。

古代（万葉集）

7世紀後半から8世紀後半にかけて編纂された、現存する日本最古の歌集『万葉集』を基に、この時代の世界観を考えてみたい。

※4　薄葬令…従来の盛大な墳墓の規模や葬送儀礼を身分に応じて制限し、簡素にしようとした法律。

写真6　紅葉する浅茅湾沿岸部の様子

① 筑前守・山上憶良は、大宰帥・大伴旅人が任期を終えて都に帰る時、以下のとおり詠んでいる。

「天離る鄙に五年住まひつつ都のてぶり忘らえにけり」（万葉集 巻五 880）

筑前国（現在の福岡市域の主要部分）を「天離る鄙（地方）」と表現している。

② 736年、遣新羅使が対馬に滞在していた時、以下のとおり詠んでいる。詠み人不詳。

「天離る鄙にも月は照れれども妹そ遠くは別れ来にける」（万葉集 巻十五 3698）

こちらは、対馬を「天離る鄙」と表現している。

③ ②同様、遣新羅使はこのようにも詠んでいる。詠み人不詳。

「百船の泊つる対馬の浅茅山しぐれの雨にもみたひにけり」（万葉集 巻十五 3697）

この歌の題詞※5には、新羅渡航直前の5日間の風待ちについて書かれている。そうした中で、対馬の港に停泊している数多くの船と紅葉の様子とが織りなす美しい情景を描いている。

以上から、奈良時代の都人らにとって、対馬は筑前国と同様の「都から離れた地方（場所）」程度の地理認識であったと考えられる。また、同時に玄界灘を越えてきた一団が紅葉の季節に5日間も風待ちを行うほど対馬－韓半島間の朝鮮海峡は、渡航条件が限られる区間であったことが想像できる。

もちろん異国と接する「国境」という認識はあったと思われるが、現在のように「絶海の孤島」という考えはなかったのではないだろうか。彼らは、眼前に広がる外洋の険しさに不安を募らせつつも、紅葉を楽しむことができる対馬を、ここはまだ「異国」ではないと捉え、自身を安心させていたのかもしれない。まだ見ぬ異国への期待や高揚感と、遠く離れた故郷への郷愁が、時流の最先端をいく都人たちの感性を研ぎ澄まし、筆を動かした。国境であるが故、一地方にすぎない対馬は、このように克明に描かれたのである。

中世（海東諸国記）

『海東諸国記』※6において、対馬は九州本島と同規模の大きさで描かれている。特に対馬島は「日本国対馬島之図」において、当時の行政区画や一つひとつの山川、集落の情報まで詳細な記載が見られる。隣の壱岐島や九州本島、琉球も本州と比べて大きく描かれていることから、当時の朝鮮人がこれら、最前線の地域に対して持っていた関心の度合いがうかがい知れる。

さらに当時の状況を類推すると、対馬島全体を捉えようとした場合、洋上からは長大な東西の海岸や、急峻な山々が見える。こうした地理的条件が、現代の衛星地図とは異なる対馬島を浮かび上がらせたのではないだろうか。

文化交流の現在地、そしてこれから

縄文時代から中世までの対馬を概観すると、絶えず南北から文化の往き来（交流）が行われる「最先端の島」であったことがよく分かる。また、その結果として、豊富かつ膨大な文化財が存している。

航空機や衛星地図等を利用している現代において、対馬は単なる「国境の島」「絶海の孤島」として捉えられることもあるだろう。しかし、その歴史的背景に目を向けると、常に大陸と日本列島をつないでいた「文化の架け橋」としての価値が見えてくる。

歴史が証明する交流の軌跡を未来へつなぐことで、今ふたたび最先端の島として新たな物語を紡いでいく時が来ているのかもしれない。

※5　題詞…歌の前に置かれ、歌の主題や歌が詠まれた事情や年月、歌を詠んだ人の情報などを記した漢文。

※6　海東諸国記…日本（倭国）と琉球国の歴史、地理、風俗、言語、朝鮮との通交の沿革を記した研究書（1471）。李氏朝鮮が、日本・琉球との外交関係を良好にするために申叔舟に命じて編纂させた。申叔舟（1417-1475）は、ハングル制定にも関わった人物。